

「北条時宗 ～元寇に立ち向かった男」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

【※このレジュメは、講演当時（平成 25 年 8 月）から大幅に加筆修正して、より充実した分かりやすい内容となっております。どうぞお楽しみください】

1. 元の建国 ～「天然の防壁」崩壊の危機

我が国は有史以来、他国からの侵略をほとんど受けたことがないという稀有(けう)な国家ですが、悠久の歴史の流れにおいては、20 世紀の大東亜戦争のみならず、それ以前にも存亡の危機を戦い抜いた事実も存在しました。いわゆる元寇(げんこう)のことです。

13 世紀の世界は激動の時代でした。モンゴル高原にあらわれたチンギス＝ハーンや彼の後継者によって、アジアから東ヨーロッパにまたがる大帝国が誕生したからです。さらにはチンギス＝ハーンの孫のフビライ＝ハーンによって、中国大陆や朝鮮半島まで支配され、国号を「元」に改めたフビライは、ついに我が国に服属を求めてきました。

しかし、若き権力者であった鎌倉幕府 8 代執権の北条時宗(ほうじょうときむね)が、これらの圧力に一切屈せず、元との 2 度にわたる戦いを制し、神代から続く我が国を守り抜いたのです。

北条時宗がここまで戦う意思をあらわにしたのはなぜでしょうか。また、大帝国たる元軍の日の出の勢いを、なぜ当時の我が国がはね返すことができたのでしょうか。

我が国が周りを海で囲まれているということは皆様もよくご存知のとおりですが、こうした「天然の防壁」を持っていた地理的環境が、中国大陆など他の勢力の侵略を受けるという危機から長いあいだ我が国を守ってくれたといえるでしょう。

しかし、その環境には「朝鮮半島に『強力かつ大陸の帝国の言いなりにはならない』独立国家が存在する」という条件がありました。なぜなら、中国大陆の支配者が朝鮮半島を自己の所有とした場合には、半島を経由して我が国を攻めやすくなってしまうからです。

このため、我が国は昔から中国や朝鮮半島との外交関係を非常に重視してきました。例えば、聖徳太子(しょうとくたいし)は朝鮮の高句麗(こうくり)や百済(くだら)と同盟を結んだうえで、中国の隋(ずい)と対等外交を結ぶことに成功しました。

また、白村江(はくすきのえ)の戦いで、我が国が中国の唐(とう)と朝鮮の新羅(しらぎ)との連合軍に敗れた

後も、唐の反撃を恐れて対岸の警備を強化する一方で、朝鮮半島を統一した新羅と国交を回復させて、唐への牽制(けんせい)としています。

さらに付け加えれば、明治期に我が国が日清・日露戦争を戦ったのも、李氏朝鮮（後の大韓帝国）を中国の清(しん)やロシアの侵略から防ぐことで、我が国の独立を守るためだったのが原因の一つでした。

我が国は、朝鮮半島を緩衝(かんしょう)地帯として巧みに独立を守り抜いてきたのですが、朝鮮が完全に他国の支配下に入ったことで侵略を受け、亡国の危機に立たされるという時期も存在しました。それこそが元寇だったのです。

かつて満州からモンゴル高原東部まで及ぶ帝国を築いた遼(りょう)は、1125 年に女真族(じょしんぞく)が樹立した金(きん)によって滅ぼされました。金はその後も領土を拡大し続け、1127 年には中国の北宋(ほうそう)をも滅ぼしました。宋の皇帝の一族は南方へ逃れて南宋(なんそう)を興し、以後は金と南宋という二つの王朝が中国大陆を支配するようになりました。

その後、我が国で鎌倉幕府が成立して間もない 13 世紀始め頃、中国大陆で金の支配下にあったモンゴル高原にテムジンがあらわれると、モンゴルは「チンギス＝ハーン」と称したテムジンによって統一されました。チンギス＝ハーンはその後も征服を続け、中央アジアから南ロシアに至る広大な地域を領有しました。

チンギス＝ハーンの後継者であるオゴダイ＝ハーンは遠くヨーロッパまで征服するとともに、1234 年には金を滅ぼし、アジアから東ヨーロッパにまたがる大帝国を建設しました。チンギス＝ハーンの孫のフビライ＝ハーンは、中国を支配するために都を大都(だいと、現在の北京)に定めて国号を元と改め、朝鮮半島の高麗(こうらい)を服属させました。

要するに、中国大陆に広大な領土を持つ帝国が現れ、かつ朝鮮半島がその支配下に置かれたことによって、周りを海で囲まれた我が国といえども、他国からの侵略にさらされる危険性が高まったのです。

2. 文永の役 ～元軍来襲で見せた「鎌倉武士の意地」

1268 年 1 月、高麗の使者がフビライの国書をもたらし、我が国に対して武力を背景に服属を要求してきました。つまり「日本よ、自分の家来になれ！」と命令したわけです。

当時の我が国を政治的に支配していた鎌倉幕府の対応としては、黙って元の服属国となることを受け入れるか、あるいは元との戦いを覚悟してでも服属を拒否するかを選択を迫られたわけですが、幕府には初めから元には服属しないという決断しか有り得ませんでした。なぜそういえるのでしょうか。

鎌倉幕府は、そもそも武力によって他の勢力を自分の支配下に置くことで成立していました。そん

な幕府が、いかに強敵だからといって元に服属してその軍門に下ったとすれば、幕府以外の組織や武士団にはどのように映るでしょうか。

「鎌倉幕府は敵に対して尻尾を巻いて逃げた」ということになり、幕府のメンツが丸潰(つぶ)れになるどころか、権威が失墜して以後の支配に悪影響を及ぼすことは間違いありません。さらに付け加えれば、そもそも幕府の「征夷大將軍」が外国に服属することを選択すれば、その瞬間に征夷大將軍の権威は消失してしまうのです（この件は後で詳しく紹介します）。

当時の鎌倉幕府の執権は、同年 3 月に就任したばかりの北条時宗でした。このとき時宗はまだ 18 歳という若さでしたが、幕府の重臣たちと協議を重ねた末、国書に対する返書を黙殺するとともに、元の来襲を予想して、九州の御家人に異国警固番役(いこくけいごばんやく)を課し、沿岸の警備を強化しました。

さて、再三送った使者を追い返されて激怒したフビライは、1274 年 10 月に高麗兵を併せた約 3 万の兵力で、我が国の領土である壱岐・対馬の両島に襲いかかりました。

わずか数百人の人口しかおらず、かつ武装もしていなかった両島の人々は、突然現れた元軍兵や高麗兵になすすべもなく蹂躪(じゅうりん)され、ありとあらゆる暴虐を受ける運命にありました。

しかし、その中で多勢に無勢を百も承知で、敢然と戦いを挑んだ対馬の武将もいました。その名を宗助国(そう・すけくに)といいます。助国は元軍の来襲を知るや、直ちに博多に早船を送り、急報を受けた大宰府は、夜を徹して早馬を鎌倉へと向かわせました。

宗助国ら八十騎の武士たちは、後に続く者を信じて、雲霞(うんか)のような元の大軍に斬り込み、壮絶な玉砕を遂げましたが、元軍を迎え撃った際に、助国の一族郎党全員が顔に笑みを浮かべていたと伝えられています。

助国たちは死に臨んで、なぜ笑みを浮かべていたのでしょうか。実は、同じように笑みを浮かべて国のために尊い生命を散らした人々がいました。大東亜戦争における神風特攻隊の隊員の皆様です。

特攻隊員の方々のエピソードの一つとして、出撃直前に撮影された写真が知られていますが、十数名の若き隊員たちは、全員が微笑みを浮かべています。

出撃の約一時間半前に素晴らしい笑顔写真を写真に留めた彼らは、異口同音に「いまここで死ぬのが、自分にとって最高の生き方だ」と語っていたそうです。

13 世紀の蒙古襲来から 20 世紀の大東亜戦争まで、700 年の時空を超えて共通する、死地に赴(おもむ)く際の微笑みは、いったい何に由来するのでしょうか。それは、日本人の「たとえ我が身は滅んでも、魂は決して死なない」と思う死生観に由来しているものであり、いわば「悠久の大義」に生きたゆえの微笑みなのです。

だからこそ、助国たちや特攻隊員の方々が、微笑みをたたえて死地に赴いたとともに、平成 23 (2011) 年に発生した東日本大震災の際に、一人でも多くの生命を救いたい、ただそれだけのために、危険を顧みずに現地へ赴かれた多くの自衛隊の皆様の行動に対して、多くの日本人が、心の奥底に眠っていた大和魂の精神を目覚めさせたのです。

さて、助国らの戦死を耳にした北条時宗や多くの鎌倉武士は「打倒元軍」を誓い、一丸となって戦う決意を新たにしました。助国らの気迫は決して無駄にはならず、その後の我が国を大きく動かしたのです。

また、助国や後の鎌倉武士の戦いぶりに対して、元軍の大將キントは「私は色々な国と戦ってきたが、こんなすごい敵と出会ったことはない」と驚き、絶賛に近い評価を下したそうです。なお、宗助国の御霊(みたま)は、長崎県対馬市厳原町(いづはらまち)の小茂田浜神社(こもだはまじんじゃ)に現在も祀(まつ)られています。

壱岐・対馬を攻め落とした後に博多湾に集結した元軍の船団でしたが、その際に両島の人々を男女とも素っ裸にしたうえで、男は手に穴を開けて船縁(ふなべり)に吊るし、女は髪の毛で吊るしてあったという記録が日本側に残されています。およそ人間のすることとは思えません。

元軍の信じられないような仕打ちに対し、怒りに震えた我が国は、九州地方を中心とする御家人を中心に彼らと応戦しましたが、それまでの一騎討ちを中心とし、名乗りをあげてから攻め込む日本式の戦闘方法が元軍の集団戦法には通用せず、いきなり大量の矢を浴びてしまいました。

この他にも、いわゆる「てつほう」と呼ばれた爆発物に馬も武士也大いに戸惑うなど、元軍流の戦闘に不慣れた幕府軍は苦戦を強いられました。

しかし、亡国の危機に対して懸命に戦い続けた幕府軍の武力は決して元軍に引けを取らず、逆に彼らを追いつめることになるのです。

それまで圧倒的な武力で他国を屈服させ続けてきた元軍でしたが、幕府軍による彼らがこれまでに受けたことがないような激しい抵抗は、元軍に大きな被害をもたらすとともに、彼らを恐怖に陥(おとし)れました。

やがて元軍は沖合に船を避難させると、何とそのまま高麗まで退却してしまったのです。この戦いは、当時の年号から「文永(ぶんえい)の役」と呼ばれています。

なお、これまでの通説では、季節外れの暴風が吹き荒れたことで元軍が退却したとされてきましたが、実際には、意外な抵抗を受けて怖くなった元軍や高麗軍が逃げ帰ったというのが真相であり、日本側の記録にも「朝になったら敵船も敵兵もきれいさっぱり見あたらなくなったので驚いた」と残されています。

こうして文永の役を乗り切った我が国でしたが、フビライがこの一戦だけで侵略をあきらめるとは

到底考えられません。今度は前回の何倍もの兵力をもって我が国に再び襲いかかるであろうことは誰の目にも明白であり、そのことが若き執権の北条時宗を悩ませました。

来日していた南宋の名僧の蘭溪道隆(らんけいどうりゅう)らと相談した時宗は、やがて元軍と徹底的に戦う意思を固めました。この決断が最終的に我が国を救うことにつながるのです。

3. 弘安の役 ～神風をもたらした「断固たる決意」

文永の役が起きた翌年の1275年、フビライは様子を見るために我が国に再び使者を送りましたが、幕府は使者の首をはねて外交拒絶の意思を明らかにしました。これは、以前に元が送った使者が我が国に長期間滞在したことで、スパイ活動をしていたのではないかと疑われたからでもあります。

元との再戦を決意した北条時宗は、異国警固番役を強化するとともに、全国の御家人に命じて、博多湾沿いに石造の防塁である石塁を築き、元の再来襲に備えましたが、その際に時宗は、工事への参加に関して一切の妥協も反論も許さなかったそうです。

元軍の来襲という未曾有(みぞう)の国難に備えたわけですし、また武家政権の棟梁(とうりょう)としても当然の行動といえるかもしれませんが、このように政治や軍事において「断固たる決意を示す」ことが、後々に大きな影響を与えることは、今も昔も変わりません。

我が国の強硬な姿勢に対して、再び日本を攻める決断をしたフビライは、1279年に南宋を滅ぼすと、返す刀で1281年の5月から6月にかけて、兵数約14万人という前回の4倍以上の兵を、二手に分けて再び博多湾に差し向けました。

軍船約4,000隻(せき)の大船軍団が、博多湾を覆い尽くすかのように来襲し、それこそ黒雲のような矢の雨を降らせてきましたが、防備力の高い石塁が存在していたことや、文永の役を経て相手の戦法を理解していた幕府軍が冷静に戦ったこともあって、元軍はなかなか上陸ができませんでした。

それでも、元軍の一部が幕府軍の守備の及ばない搦(から)め手から上陸し、博多の町に侵入して乱暴狼藉(らんぼうろうぜき)を働きましたが、すぐに幕府軍に見つかって、街中で激しい戦いを繰り広げました。

一方の幕府軍も、夜になって周囲が真っ暗になると、夜陰にまぎれて敵船に乗りこんで火をつけ、あわてた敵兵を討ち取るといったゲリラ戦を敢行するなど健闘を重ね、戦いは膠着(こうちやく)状態となりました。

そして7月1日(現在の暦で8月16日)、北九州方面を襲った大暴風雨によって、元軍の乗っていた軍船がことごとく破壊され、多くの兵が亡くなりました。戦意を喪失した元軍は高麗へと引き上げ、国内に残った兵も幕府軍の掃討戦によって討ち取られました。元軍との二度目のこの戦いは、当時の年号から「弘安(こうあん)の役」といい、文永の役とともに元寇と呼ばれています。

さて、外国による本格的な来襲という、有史以来最大の危機を乗り越えた我が国でしたが、その背景に勇敢に戦った鎌倉武士の大きな功績があったのはまぎれもない事実です。元寇の時期がたまたま武家政権の鎌倉幕府の支配であったことも幸いしましたが、我が国の勝利には、それ以外にも様々な理由がありました。

まず元軍といっても、その大半が征服した異民族の連合軍であり、各人の戦意が乏しいのみならず、意志の疎通が十分に行われなかったという一面がありました。また、突貫工事で高麗に造らせた船は決して丈夫ではなく、しばしば転覆の憂き目にあったほか、弘安の役の際の大暴風雨で、多くの軍船が破壊されるとともに、数えきれないほどの兵の生命を奪ったと考えられています。

また、大陸を縦横無尽に駆け回る陸戦と違って、元軍にとっては不慣れな海戦であったことや、我が国の風土に合わない兵士が次々と疫病で倒れるという不利もありました。

さらに何よりも元軍を悩ませたのは、それまでに他国を征服した際に大いに利用してきた騎馬軍団が、元寇の際には全くといっていいほど使えなかったことでした。

騎馬軍団を構成する馬は非常に神経質な動物であり、海を渡って攻め寄せる際に、船に乗せることが大変難しかったことで、元軍は得意の騎馬をほとんど使えずに我が国と戦わなければならない、という大きな不利を当初から抱えていたのです。

一方、元の来襲という国難に際して、特に弘安の役の際に暴風雨が発生したことで「我が国は神風に守られている」とする神国思想がこの後に主流となっていきました。この思想は、やがて我が国に対して大きな影響をもたらすことになります。

さて、あきらめきれないフビライは、我が国に対して三度目の来襲を計画しましたが、諸般の事情で中止となり、元はその後二度と我が国を攻めることができず、やがて内乱に次ぐ内乱が起こって、1368年に明(みん)によって滅ぼされました。

また、元とともに戦った高麗も、1392年に李成桂(りせいけい)によって倒されて李氏朝鮮が成立するなど、我が国に手を出した国家がやがて必ず滅びるという結果となってしまったのは、果たして偶然の出来事なののでしょうか。

以上のように、元寇を通じて様々な動きやその背景、あるいは側面が見られましたが、間違いなく断言できることは、北条時宗による「元軍を討つ」という「断固たる決意」があったればこそ、我が国は二度にわたる元寇をはね返すことができたということです。

もし元からの服属の勧告に従っていれば、いずれは元やその後の中国の影響力が我が国の奥深くにまで及んでいたことでしょう。そうなれば、もちろん今のような我が国の平和や繁栄など有り得ない話です。

昔からの名言に「天は自ら助くる者を助く」とありますが、圧倒的な軍事力を誇る大帝国の元に対

し、祖国を護る意思を明確にした北条時宗の決断そのものが、我が国にとっての「神風」となり、同じく我が国を護るために立ち上がった鎌倉武士団が、断固たる戦いを繰り広げたことによって、その「神風」が激しく吹き荒れたといえるでしょう。

時宗による「我が国は世界に冠たる独立国である」という断固たる意思是、かつて遣隋使を送った聖徳太子以来の「国是」であると同時に、我が国固有の領土である尖閣(せんかく)諸島をしきりにうかがっている現代の「元寇」にもつながる大きな教訓ではないでしょうか。

4. 「征夷大將軍」の重責 ～現代に求められる「覚悟」

元軍の二度にわたる来襲に立ち向かい、これをはね返した北条時宗でしたが、超大国の元と長年互角に渡り合った彼のストレスは尋常ではなく、やがて重い病に倒れました。

病状は回復することなく、弘安の役からわずか3年後の1284年4月に、時宗は34歳の若さで亡くなりました。まさに元寇に明け暮れた彼の生涯であったともいえますが、我が国の命運を一身に託され、見事にその役割を果たした時宗の偉大さは、時を越えて永遠に称えるべきものであるといえるでしょう。

さて、時宗亡き後の鎌倉幕府ですが、相手が外国だったために御家人たちに与えるべき恩賞がなかったことなどもあって信頼を失い、元寇から約半世紀後の1333年に滅びましたが、一時期を除いて武家政権はその後も長く続きました。それはなぜでしょうか。

カギを握るのは、幕府の象徴であった「征夷大將軍」の地位です。

そもそもは東北地方の蝦夷(えみし)を倒すために朝廷から選ばれた臨時の役職であった征夷大將軍でしたが、戦時における徴税権や徴兵権を委任されていたことから(そうでなければ戦えません)、やがては朝廷から独立した軍事政権のトップとして、1192年に源頼朝(みなもと の よりとも)が任じられ、鎌倉幕府が誕生しました。

その後、執権の北条氏が力をつけて源氏が滅び、征夷大將軍は名目だけの地位として摂関家や皇族が就任するようになりましたが、元寇という有史以来最大の外敵、すなわち「夷狄(いてき)」を「征伐」する「將軍」としての重責を鎌倉幕府全体で果たしたことが、我が国において武家政権が高い評価を得ることにつながりました。

だからこそ、鎌倉幕府が滅んだ後に後醍醐(ごだいご)天皇によって建武の新政が一時は行われても、数年後に足利尊氏(あしかが たかうじ)が新たに征夷大將軍に任じられて室町幕府が開かれるなど、武家政権は頼朝以来700年近くにわたって続いたのであり、また19世紀後半に開国などによる混乱が続いた際に、江戸幕府が征夷大將軍として、つまり外国に対して武力以外も含めた「攘夷(じょうい)を行う意思」を明確に示せなかったことが、結果として武家政権全体の信頼を失い、明治新政府の誕生につながったともいえます。

すなわち、我が国にとって「征夷大將軍」とは単なる名誉職ではなく、国家の命運を預かる重要な地位であるがゆえに、その職責を果たせない将軍は、やがてその地位を失うのみならず、我が国が存亡の危機を招きかねないという大きな流れが国全体を包んでいるといえますが、これは現代においても決して例外ではありません。

平成 24 (2012) 年 12 月に第二次内閣を組織した安倍晋三首相は、国家安全保障会議 (=NSC) の設置や、国家安全保障戦略及び防衛計画の大綱の策定(さくてい)など、安全保障政策に関する様々な取り組みを行い続けています。

安倍内閣による政府のこうした考えは「積極的平和主義」と呼ばれ、アメリカなど諸外国と連携(れんけい)しながら、国際社会の平和と安定に向けて、これまで以上に積極的に寄与していくべきであるという、国家の基本体制を明確化したものでした。

さらに自衛隊が発足以来 60 年を迎えた平成 26 (2014) 年 7 月 1 日には、我が国の安全保障政策を大きく転換させる「集団的自衛権の行使容認」が閣議決定され、これに基づくかたちで、平成 27 (2015) 年 5 月に「安全保障関連法案 (=平和安全法制、または安保法案)」を同じく閣議決定し、衆議院での審議が始まりました。

現在の我が国を取り巻く国際情勢は、残念ながら決して安全だとは言えなくなっています。例えば、中華人民共和国は軍備を増強し続け、我が国固有の領土である尖閣諸島に対する姿勢や、南シナ海におけるあからさまな埋め立てなど、その脅威は日々高まりつつありますし、また、重大な人権侵害である拉致問題を解決しようとしめない北朝鮮が、核やミサイルの開発を続けています。

そんな中で、我が国はアメリカの「核の傘」に入ることで、これまで自国だけの平和をむさぼってきましたが、戦後に「世界の警察官」を自他共に認めてきたアメリカが、オバマ政権発足後に財政難もあって、急速に内向き思考を強めています。

要するに、戦後から 70 年が経過して、世界のパワーバランスに大きな変化がもたらされようとしているのです。しかし、これまでのように我が国が集団的自衛権を行使することなく、外国の善意と犠牲のうえに日本人の生命と財産を守ってもらい続けることが果たして可能でしょうか。

だからこそ、我が国は「外敵の暴力から身を守り合う世界のコミュニティ」に積極的に参加して、国際社会と歩調をあわせることで、自国の抑止力を高める必要があります。その意味でも、安保法案は世界的な集団安全保障を前提にした「戦争抑止法案」ともいえるでしょう。

ところが、衆議院で安保法案の審議が開始されると、民主党や共産党などの野党が「戦争法案」とレッテル貼りするのみならず、日本国憲法第 18 条で明確に禁止されていると政府が説明している「徴兵制の復活」といった、法案と関係のない主張を前面に押し出し始め、多くのマスコミがそれに同調しました。

これは、大東亜戦争後の GHQ による「WGIP (=ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム、日本人に戦争犯

罪者意識を刷り込む計画)」に基づく「日本洗脳工作」が種をまいた「自虐史観」が、あらゆる業界を支配した左翼思想をもつ売国的日本人によって増殖し続けたことが背景になっています。

安保法案について具体的な論議をすればするほど、例えば中国による南シナ海あるいは尖閣諸島をめぐる軍事的戦略を明らかにされるなど、その重要性が国民に知れ渡るのを恐れる左傾化した各界が、本質をごまかすために「戦争法案」「徴兵制」というレッテル貼りに終始している、というのが現実なのです。

自国の安全保障について真剣な論議を避けるばかりか、悪意に満ちたレッテル貼りを重ねることで法案を不成立に持ち込み、結果として我が国存亡の危機を招きかねない事態に陥(おちい)らせる。いつまでこのような愚かしい状態を許し続けるのでしょうか。

いずれにせよ、先述した「天は自ら助くる者を助く」という精神が証明しているように、今後の世界情勢を注視するとともに、気が付けば「間近に迫った亡国の危機」とならないためにも、我が国における「平成の征夷大將軍」の覚悟が今こそ問われているのではないのでしょうか。(完)

主要参考文献：「逆説の日本史 6 中世神風編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)

<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379417>

「国家の再興」(著者：西村眞悟 出版：展転社)

YouTube 再生リスト「北条時宗」

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML4Igm640tCVR8i6eMSVwmCu>

黒田裕樹の歴史講座

<http://rocky96.blog10.fc2.com/>